

## 第2回徳島県総合教育会議 議事録

日時：平成27年7月9日（木）15:30～17:25

場所：徳島県庁 3階 特別会議室

### 1 開会

（司会進行）

＜七條政策創造部長＞

本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。ただいまから、今年度第2回目となります「総合教育会議」を開催いたします。本日もご出席いただいております方々を本来ならご紹介させていただくところでございますけれども、時間の関係で別添名簿と配席表でのご紹介とさせていただきます。それぞれ名簿と配席表をご確認いただければと思います。

### 2 議事

（司会進行）

＜七條政策創造部長＞

それでは議事に移って参ります。議事につきましては、飯泉知事に進行をお願いしたいと思います。なお、ご意見のある方はご発言の前にお手元でございますマイクのスイッチを押してご発言くださいますようお願いいたします。それでは飯泉知事、どうぞよろしくをお願いいたします。

#### （1）これまでの議論と今後の進め方について

（議事進行）

＜飯泉知事＞

本日は大変お忙しい中、教育委員の皆様方にはご出席を賜りまして誠にありがとうございます。また、本日も発言をいただく皆様方につきましても、お忙しい中どうもありがとうございます。

さて、6月3日に開催いたしました第1回総合教育会議では、活発なご論議、特に今の教育における現場を含め、課題についても多くいただけたのではないかと、このように考えるところであります。これからは、いただいた提案を中心といたしまして現場はもちろん、多くの県民の皆様方から教育に関する、特に未来志向的にご意見を伺っていければなど、このように考えているところであります。今日、第2回はその意味で教育現場、あるいは特に若手の方、そして場合によっては県外からの視点、こうした点も含めてご意見をいただきたいと考えております。

ちなみに7月7日、七夕の日ではありますが、「地方創生を成し遂げる人材育成を行うための教育」につきまして、産学官はもとより、今、国では産学官だけでは足りない、これに言労金を加えて六位一体と言われるわけではありますが、この6つの代表20名の皆様方からご意見、ご提言をいただいたところであります。この場には松重教育委員長さんにもご出席をいただき、そして多くのポイントについてご示唆をいただいたところでもあります。どうもありがとうございます。私の印

象としては、資料4にその場のものを取りまとめしておりますが、教育のあり方について関係各方面、大変関心が高いなど。特に若い世代の皆さん方からは是非、若者の声をもっともっと聞いてもらいたいということで、総合計画審議会の若者クリエイト部会の代表がご出席をいただいたわけですが、自分たちの若者クリエイト部会、この中でも是非、お聞きをいただきたいと、前向きのお話もいただいたところでもあります。

それでは早速ですが、今日の議事を進めて参りたいと思います。今日は次第にございますように「(1) これまでの議論と今後の進め方について」事務局から説明を行って参ります。よろしくお願いたします。

### (事務局説明)

#### <梅田総合政策課長>

総合政策課長の梅田でございます。それではお手元にご配付の資料1「第1回総合教育会議における主な意見」をご覧ください。6月3日に開催いたしました第1回会議におきまして委員の皆様からいただきましたご意見を、地方創生の視点から教育を考える、キャリア教育の重要性など10項目に分類・整理をさせていただいております。本日、ご意見をいただく際のご参考にしていただければと考えております。

次に資料2「徳島教育大綱(仮称)について」をご覧ください。今後の議論の進め方でございますけれども、さきほどご覧いただきました第1回会議での議論を踏まえ、地方創生を成し遂げる人材の育成に向け、「徳島ならではの」大綱の策定を基本的な考えとしまして、様々な手法を活用し、県民の皆様や教育現場の意見を聴取し、大綱に反映して参りたいと考えております。その手法でございますけれども、さきほど知事からご説明がありましたように、県民の声を集める手法ということで、昨日、7月7日に開催いたしました「地方創生“挙県一致”協議会委員」の皆様から資料4のとおりご意見をいただいているところでございます。また、「新未来『創造』とくしま行動計画」及び「vs東京『とくしま回帰』総合戦略」策定時におきまして県民の皆様からいただいたご意見を資料3-1、資料3-2のとおり再整理するとともに、意見募集型のパブリックコメント、SNSを活用した意見募集を来週、7月13日月曜日から実施して参りたいと考えております。

次に、生の声を直接聞き、大綱に反映する手法ということで、本日の会議におきまして、株式会社ハレとケデザイン舎の植本さんをはじめ、6名の皆様からご意見をいただくこととしております。なお、今後におきましても必要に応じまして意見を聴取する機会を設けて参りたいと考えております。

今後、本日いただきましたご意見、総合教育会議でのご議論、また挙県一致協議会委員の皆様やパブリックコメント等を通じて県民の皆様からいただいたご意見を踏まえまして大綱骨子案を取りまとめて参りたいと考えております。以上でございます。よろしくお願いたします。

### (議事進行)

#### <飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、今の事務局からの発表につきまして、ご質問ございましたら承りたいと存じますがいかがでしょうか。よろしゅうございますか。はい、ありがとうございます。それでは、早速、進めて参りたいと存じます。

それでは「(2) 現場からの意見等について」であります。今から、事務局からも説明させてい

ただきましたように、様々な分野においてご活躍をいただいている皆様方からご意見をいただこうということでございまして、まず最初に三好市のサテライトオフィスでデザイン業及びカフェを営まれておられます株式会社ハレとケデザイン舎植本社長さん、どうぞよろしく願いいたします。

## (2) 現場からの意見等について

### < (株) ハレとケデザイン舎 植本代表取締役社長 >

はじめまして。ハレとケデザイン舎の植本と申します。本日はこのような会にお招きいただきましてありがとうございます。私にお声がけいただいたということはおそらく、別の県の都心からなぜ来たのかということに尽きるのではないかと思います。資料をまとめさせていただきました。

まず私たちの簡単なプロフィールなんですけど、私はデザインを20年続けていまして、妹はパティシエをしております。デザインとおいしいものという構成で皆様と仲良くしてもらおうと思ってやってきました。今やっていることはカフェを営んだり、廃校を活用してその卒業生の方を招き入れたりとか、メニューで一番多いのは親子で何かをしていただくようなイベントごとが最も盛んになっています。そして私が続けていたデザインという、こういった仕事も子どもたちに教えていけたらいいなと今、計画をしているところです。

移住の理由なんですけれども、簡単にまとめてみました。子育ての環境として自然がある場所というのを選択したかったということが一番の大きな理由です。そして休廃校の活用など取組に興味があった、これは私が所属している三好市での話です。そして次が、今も息づく昔ながらの文化、神様との距離が近い暮らしにあこがれて来ました。これはおそらく東京都内では全く無い部分でして、しかも山ならではの話だと思うんですけれども、こういった文化に結構あこがれている友人たちは都心に多いです。ここでしかできない子育て、ここだからできる教育は何だろうということを常日頃考えているところです。

まずあるのは、世界が注目し始めている秘境と呼ばれる大自然があるなと思っています。ここにしかないと思っているのは日本の文化とか大自然、これは一度無くしてしまっ取り戻せない状況にある都心もたくさんあると思うので、この大事な宝だと思います。そして秘境と呼ばれるこの大自然で親として、私がここに来た一番の理由なんですけれども、自然を知る、身につける。都会にも公園はあるんですけれども、結局作られた緑なので本当の自然では全くありません。それはどうということかというとなんかちょっとした天災とか起きた時には全く自然と向き合うこともできなければ、一体何がどうしてということが分からない状態なんですよね。川や山などの自然といったものも全く遊び慣れていませんし、ちょっとでも自然と近いところにいったらいいなと結構、たくさんの方が思っています。

それとインバウンドに乗っかると書きましたけれども、やっぱり世界と近い距離の場所に行きたいなというのは、小さい子どもを持つ親は誰でも思うかと思うんですけれども、徳島県の特に三好市の秘境の付近というのは、海外のお客さんがすごくたくさん、普通にいます。ということはネイティブな人とすごくコミュニケーションがとれるので、何かと生きた英語だとか、ライフスタイルでのコミュニケーションがとっていけるので、ここは利用できる価値がたくさんあると思っています。

ということで、制度がどうかは私もよく知りませんが、私が廃校を活用させていただいて、子どもたちが出入りする場所になりつつありますので、せっかくだからやろうと思っているのは、まず自然の中で育ててほしいなと。これ実はちょっと意外だったんですけれども、やって来

たら、全く子どもたちは外にいません。みんな家でゲームをしているとか、車に乗ってレジャー施設に行くとか、そういう普段の行動っていうのは全く自然と関係ないんですね。そこがちょっと私にとっては全く予想しなかった部分で、もっとみんな川で遊んでいると思ってましたし、山にもカブトムシとか捕りに行っているものだと思ってました。それはちょっとなんとかしたいなと思っています。

そして日本の文化を知る。これは山の子どもたちっていうのは自分でしめ縄もできますし、いろんなお祭りとかを通して日本の文化っていうものを暮らしの中で知っています。そういった昔ながらのことは是非、日本人として教えたいたいというふうに思っています。それを知った上でグローバル環境に飛び出してほしいと思ってまして、はじめから子どものうちから英語漬けで日本のことも知らないのに世界に飛び出していくようなことよりは、こういったきちんとした日本の文化のある地域で育ちながら、海外の方とのコミュニケーションができるような大人になってほしいとみんな思っているんじゃないかなと思います。海外留学みたいなことも、できればいろんな制度も、ちょっと聞いたところでは姉妹都市もあるようですし、もう少し近くなったらいいなと思っています。次が重要かなと思うんですけれども、是非帰ってきて海外で勉強したものを、戻ってきてそれをうまく利用できるような、帰ってこられる場所を作りたいなと思っています。郷里である日本の文化を持って海外に飛び出して、広い視野で戻ってきて、新たな文化を築くような大人になってほしいと私自身が思ってこちらに子どもを連れて来たものですから、こういったことを目指して学校を使っているいろいろやっていきたいなと思っています。ありがとうございました。

#### (議事進行)

##### <飯泉知事>

どうも、ありがとうございました。今、植本社長さんのほうからは神様に近い場所と、また世界への壁が低い教育環境。徳島にずっといるとなかなか分からない視点を説明していただきました。自然、文化をはじめとする徳島の良さをおっしゃっていただいたところでありました。実は、7月7日、挙県一致協議会の中でも多くの委員の皆さん方が、もっと徳島の良さを子どもさんに教えないといけないよと異口同音に言われたところでもありました。どうもありがとうございました。

それでは次に、教育の現場からそれぞれご説明、発表をいただきたいと思います。まず最初は義務教育を代表していただきまして、濱田先生にお願いをいたしたいと思います。

##### <徳島市城東中学校 濱田教諭>

徳島市城東中学校、濱田あゆみです。よろしくお願ひします。私は新任教員として美馬市立江原中学校で3年間勤務し、本年度より徳島市城東中学校で英語教師を務めています。今年度は1年生を担当し、女子バレーボール部の顧問をしています。現在教員生活4年目を迎え、夢や希望を持った子どもたちを育てたいと多くの先生方と願ひながら、子どもたちと向き合っています。

私自身は、幼い頃から教員になりたいという夢を描いていたわけではありませんが、今振り返ってみると、私の生活の中には、学校、地域、家庭を含めて、夢に繋がるきっかけがたくさんありました。そのきっかけの一つが、信頼できる先生方との出会いです。新しいことにチャレンジし、夢に向かって働く先生方の姿は、私のモデルであり憧れでした。次に、小学校から高校までのソフトボール部での経験です。目標に向かって努力する私の周りには、いつも仲間がいました。キャプテンとしての経験が、人と人とが繋がる楽しさを見出すきっかけとなりました。さらに、イギリスへ

の留学経験も大きなきっかけとなりました。自由度の高い授業を経験し、発信力の重要性を痛感するとともに、新しいことにチャレンジする中で、自分から動き出さなければ何も始まらないということを実感しました。自分から動き出すからこそ感じられる喜びや楽しみがあることを知り、発信力や主体性の重要性を子どもたちに伝えたいと思うようになりました。これらの経験の中には、もちろん失敗や挫折もたくさんありましたが、それらのチャレンジがすべて、私の夢へと繋がったと思います。

この、英語教師になるという夢が叶ってからの3年間、夢を持てる生徒の育成に向けて、小さな成功体験を積み重ねる場面やきっかけを与え、チャレンジを楽しむ生徒を育成することを目標に取り組んできました。英語科だからこそできる取組みに焦点を当て、繋がり合う楽しさを実感できる授業を心がけてきました。授業の5割以上をペアワーク、グループワークで構成し、自分の意見を伝え他人の意見を知る楽しさを実感させる授業を行ってきました。さらに、発信力と主体性の育成を意識した活動を取り入れてきました。英語授業の主役は子どもたちです。教師主体の一斉授業では、生徒の発信力や主体性を育成することは、なかなか難しいと考えています。自分の好きなことを英語で伝えるといった簡単な活動から始め、「ええとこやけん徳島」と題したビデオレターを作成し、祖谷のかずら橋や阿波踊りをALTの家族に紹介するというビデオを送りました。さらに、この子どもたちは、自分の夢を英語で語るという活動にも取り組んできました。また、「We Love Japan」と題したビデオレターを作成し、それを実行しました。ここで、生徒が作ったビデオレターをご覧ください。

(ビデオ視聴)

このように、授業の中にチャレンジを仕掛けることで、子どもたちは、「できた」という小さな成功体験を積み重ねました。彼らはとても良い笑顔で発表をしていますが、右側の生徒は英語が苦手だっただけではなく、2年生の頃には生活が乱れ授業に参加しようとしなかったことも多々ありました。しかし前向きで積極的な性格だった左側の生徒とペアになり、原稿の作成からビデオの撮影まで全て2人で取り組みました。1年前の右側の彼の姿からは想像もできないような成長を遂げ、仲間と繋がりあい発信力を育成する英語授業の持つ力を再確認しました。生徒たちの変容により、どうせ無理という雰囲気だった教室が、様々なことにチャレンジしやすい雰囲気へと変容していきました。3年生の最後には、自分の夢を英語で語るというタスクに取り組み、全員が自分の夢を英語で語りました。堂々と英語で夢を語る生徒の姿に心を打たれ、私自身も生徒も涙するような感動的な授業となりました。

このように、15歳の彼らは今の自分に自信を持ち、英語で夢を語るまでに成長しました。この生徒たちの姿を見て、私と同じ年齢になる10年後、そして20年後も、夢を描き続ける大人になってほしい、そして毎日のチャレンジを楽しんでほしいと感じるようになりました。そのために、夢に繋がるきっかけに出会った時に、身近なことからチャレンジしていこうとする素地、粘り強く取り組むたくましい心、そして自分ならできるという自信をこれからの子どもたちに身につけさせることが私の目標です。そして私自身が新しいことにチャレンジし、夢に向かって歩み続ける大人のモデルであり続けようと思います。

最後に、私が生徒に向けて自分の夢を英語で語ったスピーチをさせていただきます。

I'd like to tell you about my dream. My dream is to be a better English teacher. To realize my dream, I will never stop pushing myself. I will brush up my English and pass Eiken Grade 1. Also I will try hard to make my English classes much more fun.

If you can dream it, you can do it. Never settle, always challenge yourself to be

better. I know you will all become wonderful adults and I look forward to seeing you again when you've all grown up. Thank you.

ありがとうございました。

### <飯泉知事>

どうも、ありがとうございました。濱田先生からは英語の教師になる夢との出会い、そして教師としての活動。また今、教え方の問題として生徒主体の授業というものを掲げていただきました。英語を通じてのアイデンティティーをしっかりと、そして苦手意識を取り払うことによって、見事に生徒が目標を持っていくと、最後には英語で熱く、ほとんどネイティブと変わらぬ発音で行っていただいたところですよ。どうもありがとうございました。

それでは次に、今度は特別支援教育を代表して大久保先生にお願いをいたしたいと存じます。

### <徳島県立みなと高等学園 大久保教諭>

徳島県立みなと高等学園、大久保秀昭です。よろしく申し上げます。私は特別支援学校の教員として採用されて18年目を迎えます。その中で2校目の阿南支援学校、それから現在勤務しております、みなと高等学園での取組を発表させていただきます。

阿南支援学校では、特別支援教育巡回相談員として地域支援を行ってまいりました。その中で、LD、ADHD、高機能自閉症という発達障がいの子どもたちと出会いました。支援を必要とする子どもたちや、先生方が地域にはたくさんいるということ、そのときに知りました。地域の先生方と発達障がいの特性や支援方法について学び知識を深め、地域支援を進めていくことができました。その成果として、阿南市特別支援連携協議会の立ち上げや就学支援シートの開発に携わらせていただきました。福祉・医療・労働・教育が連携し、チームとして支援していく大切さを、このときに実感いたしました。また、何かを成し遂げることの達成感、充実感を味わうことができました。そして、支援を進めていくうちに、もっと発達障がいの子どもたちを支援していきたいという気持ちが高まりました。そんなとき、発達障がいの生徒を対象としたみなと高等学園が開校するという話を聞きました。私は、ここで働きたい、そう思うようになりました。強く思えば願いは叶うもので、私は開校準備段階からみなと高等学園に関わらせていただくことができました。

みなと高等学園は、平成24年度、高等学校段階の発達障がいの生徒を対象とした全国初の特別支援学校として開校しました。社会的・職業的自立を目指す教育を行っています。発達障がいの生徒は、コミュニケーションが苦手な失敗経験も多く、自己肯定感が非常に低い生徒が多いです。そのため、社会性の育成として自己肯定感を高める取組、また青年としての実感、大人へのスムーズな移行を目指して、「さん」付け呼称、能力が高くてもわかっていなかったり、間違っていて覚えている失敗経験を繰り返すこともありますので、一つずつ丁寧に教えることを通して社会性の育成を行っています。

また、職業的自立を目指し、働く力の育成、就業体験を行っています。これは、2週間から3週間、事業所において実習を行い、働く経験を積む取組です。写真のように、様々な事業所で実習をさせていただいております。就労するためには、実習だけでなく普段からの取組が大切です。作業スペースの確保や、施設設備の充実が現在課題となっております。これらのことが解決していくと、より働く力を育成することができるのではないかと考えております。次は販売実習です。本校には、ミニ店舗が校内にあります。そこで、接客、売上計算、商品の前出しや商品の整理、仕入れにいた

るまで、生徒が行い働く経験をしております。次は検定への挑戦です。全国商業高等学校協会主催のビジネス文書実務検定試験や、珠算・電卓実務検定試験、また、介護、ビルメンテナンス、接客、ICT等の各分野における実践的な技術を学ぶためのとくしま特別支援学校技能検定にもチャレンジし、成果をあげております。

このように、前例がない状態で全ての支援をオーダーメイドで作り上げ、昨年度、第1期生が社会へと旅立ちました。就労希望者23名全員が就労し、現在も働いております。苦手さを抱えた子どもたちが、仕事の楽しみややりがいを覚え頑張って仕事をしていく中で、それ以上に悩みやストレスを感じていることもあります。障がいがある子どもたちが働き続けていくためには、障がいがある人もない人も互いに認め合い、支え合える全員参加型社会が必要であると考えています。

平成27年3月4日、教育再生実行会議からは、学び続ける社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育のあり方について第6次提言がなされ、その中で多様な人材育成の観点から、特別支援教育については障がいの有無にかかわらず、共に学べる環境づくり、高等学校段階における特別支援教育の充実が大切であると言われております。特別支援教育の充実を目指して、現在、みなと高等学園で共に学んだ高等学校の先生方が、高等学校で発達障がいの生徒を支援し、高等学校における特別支援教育の核となれるよう、協働しながら支援にあたっています。また、本校での実践が多く的高等学校において活用でき、特別支援教育の手法が広がり、子どもたちの支援に繋がるよう、県内だけでなく全国へ発信をしていきます。このような取組によって、共に学ぶ環境が整備され、共に働く職場が増加し、全国に誇る発達障がいの支援を行うことで、障がい理解が進んでいくのではないかと考えております。誰もが安心安全に暮らし、子育てができ、教育を受け、働くことができる活力ある暮らしやすい地域になっていくのではないかと考えております。これは、特別支援教育からの地方創生へのアプローチであると思います。

最後に、私の目指す夢ですが、障がいのある人もない人も、共に学び共に働く社会の実現。とても大きな目標かも知れませんが、これに向かって一つずつ実践を重ねていきたいと思っております。ありがとうございました。

### <飯泉知事>

ありがとうございました。大久保先生からは発達障がいの子どもさんたちとの出会い。ここから、企画立案から担当されたみなと高等学園。全国初の、従来の教育、福祉、医療これに加え、就労と、その中で前例のないオーダーメイドの教育を創り上げていただいたところでもあります。また地方創生のアプローチ、ここにも触れていただいたところで、全員参加型社会、こうしたものをこれから打ち立てていこうと。日本の教育の方向もお示しをいただいたところでありました。どうもありがとうございました。

それでは次に、普通科高校を代表して福田先生からお願いをいたしたいと存じます。

### <徳島県立城ノ内高等学校 福田教諭>

徳島県立城ノ内高等学校、福田幸と申します。本日は、非常に微力ながら、徳島の英語教育における夢について語らせていただきます。私は東京の大学に進学した際、地方と都市部の英語の教育力の格差というものを痛感いたしました。特に、英語を話す、そして聞くとといった実践的な英語力という点で、自分が非常に苦勞をしたことを覚えています。英語教員になりまして徳島に帰った際、徳島の未来を担う子どもたちが、これから国際化していく社会に遅れをとらないような英語力を育

成したいと深く決意しました。

今年度、教員として18年目を迎えます。城南高校、中央高校、川島高校を経て、本年度城ノ内高校に勤務いたしました。どの学校でも私が一番驚いたことは、英語が苦手な生徒が非常に多いということでした。全国的に見ましても、高校入学時には過半数を超える生徒が英語に対する苦手意識を持っておりまます。しかし、今までの実践から、私は高校で英語を得意にすることができる、そういう教科であると確信しました。なぜなら、英語が苦手になる原因は主に三つだからです。まず一つめは単語が発音できない、そして文法がわからない、また単語が覚えられない、こういったことです。そこで私は単語が発音できない生徒には、個別でしつこいくらいに発音指導を繰り返し繰り返し1学期当初に行いました。インプリンティングすることで、生徒が英語を見て反射的に発音ができるようになるまで行いました。また、文法が分からない、単語が覚えられない生徒は、生徒を小さなグループにしまして、競わせたり協力をさせながらその中で学習をさせることにしました。昨年度まで川島高校では、野球部、サッカー部といったクラブ活動にいきますと、生徒が非常に意欲的に小テストや放課後のスピーキングテストに取り組んでくれたことを覚えています。

また、得意な生徒の中にも英語に対する自信が持てない生徒もいましたので、私はそういう生徒に英検へのチャレンジを勧めるようにしています。特に授業では計りきれない自分のスピーキング力、リスニング力といったコミュニケーションの客観的な評価をいただきます。それが生徒のモチベーションに繋がっていきました。英検に合格した生徒は純粋に喜び、自発的にALTの先生に話しかけに行くようになりました。そうした生徒の姿勢は、本当に私も嬉しかったですし、生徒が自主的な学習者に育ってくれたと感じました。生徒の学力差はまちまちですが、生徒と英語の距離感を縮め、そして英語学習に対する前向きな姿勢を育成できたと感じています。

それから、今年度リーディングハイスクールとして城ノ内高校に勤務する中で、実践したいことを三つ申し上げます。まず一つめは、英語の運用能力の育成、生徒の実際に英語を使う力をしっかりと育ててあげたいということです。新しい大学入試制度では、実際に英検やTOEICといった制度が利用できます。その中で、授業や学校生活全般において、また学校の外に飛び出して、生徒の4技能をしっかりと高めてあげることが大切だと思っています。幸い、城ノ内高校にはコールシステムと呼ばれる、コンピューター・アシスティブ・ランゲージ・ラーニングですけれども、学習支援施設が備わっておりまして、そういったものを有効に活用しながら、英検準1級、TOEIC 730点、TOEFL iBTが70点、留学にも行こうじゃないかといった生徒をどんどん輩出していきたいと感じています。

二つめですが、英語の溢れる授業づくりです。文科省が求めております英語での授業ということで、現場は私も含め非常に苦勞しております。しかし、アクティブラーニングも叫ばれる中、生徒が主体的に学べるような題材を工夫して選ぶようにしています。特に、生徒の頭を揺さぶるような授業を展開したいと考えています。具体的には、生徒の発信力を高めるために、日常生活にコミットした日記を英語で書いてみる、また、家族や友達との会話、クラブ活動、そして将来の夢といっ

た生徒が比較的取り組みやすい題材を英語で書かせ発表させています。また、生徒の即興力、英語を準備なしに使う力、そういったものを育てるために、インターネットや英字新聞といった生の教材ですとか、ホームルーム活動を実際に英語で行うということも非常に楽しいのではないかと計画中です。大事なのは生徒が、こんなことが書きたかったのに書けなかった、上手く言えなかった、そういった内容を文法事項や適切な単語やイディオムを用いまして、教員が明確にしてあげることです。そこで初めて、生徒の実生活と英語が繋がってくると感じています。生徒の実生活に英語を落とし込む、そういったことを一番大切に取り組んでいきたいと感じています。

そして三つめですが、オーセンティックな英語に触れる機会を城ノ内生だけではなく、徳島の子どもたち全員にもっともっと与えてあげたいと感じます。昨年度からの取組でもある「Tokushima 英語村」、それから、「飛び立て留学ジャパン」のような制度が非常にありがたく感じます。学校教育としましても、その使命や特性から同じような取組をすべきだと考えております。私はもっと地域を巻き込んだ企画、イベントを立案し、運営していきたいと感じています。特に、県内4大学に通う留学生、我々英語教員、ALTがもっと連携しまして、県内の学校でイングリッシュパーティやスポーツ大会なんかを開きたいと思います。その中で、小学校、中学校、高校の生徒が交流できるような場を、もっともっと作っていきたく感じます。ホームステイや留学をすることは非常に難しいことですが、もっと工夫をすれば、徳島の中でもオーセンティックな英語を使っていく機会を作ってあげられると感じます。子どもたちに早い段階で英語を使う楽しさを伝えたい、そんなふう感じます。

最後になりましたが、若い時には、優秀な子どもたちを優秀な大学に送りたいという使命に燃えている時期がございました。しかし、優秀な子どもたちが学んだこと、そして、卒業して社会に出た子どもたちがふるさと徳島のために自分が学んだことを活かしたいと、そういった生徒を増やすこと、そういったことも我々高校教員の使命であると感じています。そして、徳島と世界を繋げるグローバルマインドを持った人材をもっと育てたいと感じています。そのためには、自らの挑戦になりますが、私自身、英語を使いチャレンジし学び続ける姿勢を忘れません。そして生徒のやる気を起こし、変えてあげられる教師でありたいと思います。それから教員としての資質・能力の向上ももちろんですが、人間としての豊かな魅力の溢れる教員でありたいと感じます。

最後に今年の夏、全国から集まりました11人の先生方とケンブリッジ大学にて英語研修に参加させていただきます。そこで自分が実際に異文化に触れ、英語での生の授業を体感することで、これからの自分の授業づくり、教育活動全般に活かしていけるよう、しっかり学んでいきたいと思っております。今日は、ご清聴ありがとうございました。

### <飯泉知事>

福田先生、どうもありがとうございました。大学時代に都市部と地方の英語力の違いを実感された。そして英語の教師になっていただいたわけですが、高校生の英語の苦手意識を非常に実感させられたんですね。その解消法、具体的な目標を定め、実践へということ、留学に行こう

ではないかと、こうした生徒を築き上げていこうということですね。今回、ケンブリッジ大学、大いに研鑽積んで頑張ってきてください。ラグビーのワールドカップもありますので、是非、そちらのほうもよろしくお願ひしたいと思います。ありがとうございました。

それでは次に、専門高校を代表していただきまして、尾崎先生よろしくお願ひをいたします。

### <徳島県立徳島科学技術高等学校 尾崎教諭>

徳島県立徳島科学技術高校の尾崎と申します。本日は、専門高校から魅力ある徳島づくりということで、すごろく風味のプレゼンで紹介させていただければと考えております。

まず、最初に私がこれまで実践してきましたことについて、ご紹介させていただきます。私は、子どもの頃からもの作りが好きでした。高校に進学する際に、卒業時の進路についてあまり深く考えずに、工業高校の方へ進学しました。学校では、電気・情報などの専門の学びの中から、より高度な知識や技術を学びたいと強く感じるようになり、卒業時の進路を進学というふうに決めました。進学先は専門学校へ進学しました。専門学校では高度な情報の技術について学び、その後県内の企業の方へ就職をし、5年ほど県内の企業で自動機械の製造、設計、営業をしながら、同時に社内のシステムエンジニアとして、システムの保守・運用に携わりながら知識や技術を高めてきました。

あるとき、新入社員として工業高校の卒業生が入社してきました。そのとき、仕事をしているその子の姿で非常に苦勞しているのを見ました。私も工業高校の卒業生として、その子の気持ちがすごく分かりました。そこで少しでも役に立ちたい、私が学んだ知識や技術を役に立てたい、役に立たせていきたいと強く考えるようになり、その後、実習助手の採用試験を受け、任用されることになりました。採用された後には、高校生では中々難しいというふうに言われております情報処理の資格試験の指導に携わりながら、企業で学んだ知識を活かしながら、ロボットの製作を通して全国大会に参加することで、全国でも準優勝を修める生徒に携わることができたことは、いい経験となっております。

また、私の専門は情報ということもありまして、全国で開催されております各種の研究大会でも発表をしております。最近では、学校の成績や学籍の状況を把握するためのシステムの開発をしました。これは、現在、徳島県の総合教育センターの方で学校支援システムのベースとなり、県立高等学校の方で既に運用が始まっております。その他にも、多くのシステムの開発を続けております。採用されてから14年間、多くの生徒に携わりながら充実した日々を送っていましたが、やはりより多くの生徒たちと関わりたい、さらに自分を高めていきたいというふうに強く考えるようになり、教諭の採用試験を受けました。そして、現在は徳島科学技術高校で、多くの生徒の進路を実現するために、日々努力をしている毎日を送っております。

次に、現在の進路選択のできる専門高校について、少しご紹介をさせていただきます。専門高校には、現在入学してくる生徒たちというのは、私が高校進学した際と同様に、進路を就職・進学を考えずに入学してくる子が少なからずいます。その子たちは、専門分野の学習の中から、授業や実習、また、工場見学や大学訪問など体験的な学びの中から、それぞれの進路を選択していきます。就職をする者であれば、私たちはその子たちが必ず合格できるよう、内定ができるように徹底した指導を行っております。卒業後、社会人になった専門高校の子たちは企業の中で実践力を向上し、離職をすることなく頑張ってくれているという話もたくさん聞かせていただいております。

また、専門高校を卒業しながらも、進学を目指す子も増えてきております。特に、最近では国公立大学への進学を希望する者が増加の一途です。そのため私たちは、その進学をするための受験対

策の教科指導や、また、入学後に必要となる学力の向上のための補習を年間を通して随時行っております。大学の先生方と情報交換をさせていただいた際には、専門高校の子たちはすごい目的意識をもっている、大学入学後に知識の向上を目指してしっかりと頑張ってくれて、学力も優秀で最後卒業していく、大手の企業に就職をしてくれるというふうな話を聞いております。このように、専門高校は生徒一人一人の可能性を広げるだけでなく、社会に貢献できる学校だというふうに私は考えております。ただ、このままの専門高校のままではあまりおもしろくない、というわけではないですけれども、もっともっと発展をさせていきたいというふうに強く考えております。

次に、私がこうなればいいなと思うような専門高校の夢について、少しお話をさせていただければと思います。例えば、工業高校であれば、もの作りが好きなように、他の専門高校でも同様に、高校でこれを学んでみたいという強い思いを持って、是非入学してきてほしいと考えております。入学後、多くの経験や体験の中から、それぞれ自分に最適な進路を考えていけばいいと思っております。さきほども申し上げましたように、専門高校は柔軟に進路に対応することが可能です。特に就職は、従来通り職人や技術者として産業を支える人材として、我々はこれからも育成を今以上に重点的に行っていきたいと考えております。

また、私は、今まで歩んできた人生は悪いものではなかったというふうに考えております。しかしながら、あのとき大学へ進学をしていたらどうなったのだろうかというふうに考えることがあります。そのため、今まで大変苦労したことや悩みなどがたくさんあります。そして私は回り道をするような人生の中で、多くの経験を学んできました。これから、私の人生と同じようなことをするのはなく、一人一人の可能性を広げるため、生徒自身や社会のニーズに応えるためにも、今後の専門高校は、上級学校への進学を強力にサポートしていく必要があるのではないかというふうに、私は考えております。

私たちは、就職をさせるため、進学をさせるためではなく、あくまでも社会に貢献する人材を育てることを願っています。例えば、教育大学を卒業した子であれば地元に戻り、地元の学校で教師として、また神山のサテライトオフィスなどは起業をするのに最適な場所なので、これは本校の生徒が研究員として行ったところなのですが、学んで地域に戻ってきて、IT産業などを徳島からグローバル化するなど地域貢献のために頑張ってもらいたい、徳島を全国一魅力ある県にするための一翼を担ってもらいたいと私は考えております。

最後になりましたが、徳島の魅力は何ですかと聞かれたときに、私は、徳島に誇りを持って全国の方々に紹介できるような人材を専門高校から育てていきたいと強く考えております。発表を終わります。ありがとうございました。

### <飯泉知事>

ありがとうございました。尾崎先生からは、自ら工業高校出身ということと、そのキャリアで県内で就職、また実習の助手、さらには教師へと。こうしたキャリアから専門高校の生徒の皆さん方が最初に目的を持って来ていないんだと。しかし高校にいる間にしっかりと目的を持たせて、そして就職、これはもちろんあるんですが、それから大学進学へといった形で、これからは目的意識をしっかり持って進んでいただこうということ。また、社会に貢献できる人材の育成をしていくべきだと、こうした点を熱く語っていただいたところでありました。どうもありがとうございました。

それでは次に、今度は、県庁を代表して、若手代表ということですが、教育委員長さんから「vs東京」、これは一体誰が考えたんだと。知事か。いやいや私じゃないですよねということで、

そのタスクフォースを代表して加藤係長さんからお願いをしてもらいたいと思います。どうぞよろしくをお願いします。

#### <徳島県政策創造部地方創生推進課 加藤係長（vs東京タスクフォースメンバー）>

地方創生推進課の加藤と申します。いきなり「vs東京」でしゃべっていくということで、立派なお話がたくさん続いた後であれなんです、「徳島は宣言するvs東京」ということで、徳島県の共通コンセプト、今、知事から誰が考えたんだという話があったんですが、一生懸命、県庁の若手で、20代から40代までの職員で考えて、昨年9月9日に知事から、「徳島は宣言するvs東京」を発表いただきました。一緒に発表しているのはドローイング&マニュアルという神山にサテライトオフィスのある映像制作会社で、大河ドラマ八重の桜で阿波藍をタイトルバックに使うなど、徳島ともゆかりのある菱川さんです。このコンセプト動画が、エッジの効いたとの表現もいただいたんですけども、非常に挑戦的な、「東京を救ったるわ」みたいなことを言っているフレーズが受けて、ユーチューブで10日間で10万回再生されたということもあり、各社、メディアに取り上げていただいて、全国放送でもバンバン流れるようなことになりました。そちらがちょっと先行して「vs東京」ってなんなのっていう話が後からきたんですが、我々がこの「vs東京」に込めた意味としては、東京にない価値を徳島ならではの魅力として発信していこうと。東京はこれから高齢化の波が襲ってくる。徳島は既に高齢化が進んでいるが、課題解決先進県として頑張っていこうというように、東京に先んじていろいろ課題を解決していくんだと。そういう発想のもとで、東京より徳島がこういうところでイケてるんじゃないか。そういうのをどんどん出していこうと。東京にいる人って東京だけでなんとなく成立していて地方のことなんか考えてない。地方の魅力を発信する時に、そこに突き刺す矢として、「vs」って言うてみたらどうだろうか。どんどん東京から来てほしい、これはあるいは徳島だけじゃなくて他の地方も同じような状況じゃないかと。東京に一極集中しすぎているんじゃないかということで、これを言うていくことで地方全体を元気にして、その結果、過密で厳しい状況にこれからはなっていく東京も救っていこうではないかと、そういう発想で考えてたものです。

それがちょうど、うちが考え出したのが早いんだと僕は言いたいんですが、国では地方創生ということと言われるようになりまして、実は内容を見るとうちが考えていたことと軌を一にすることになりまして、「vs東京」は地方創生の具現化であり、徳島にとってはその旗印だということで、今度策定する総合戦略も「vs東京」を冠していこうということになっております。

10項目の強みということで、「vs東京」っていうからには何が勝っているんですか、どこが徳島の強みですかっていうのを10項目選定しよう。これもまたタスクフォースで何日もかけていろいろ議論をして、何がイケてるか、データもたくさん集めました。それでこの10項目にしました。10本の動画も公開してウェブでも流れているんですが、そこまでは「やったな」と思っていたんですけども、さきほど、松重委員長のお話があったんですが、教育に「vs東京」っていう話だったんですが、この10項目に教育の字が出てこないんですね。子育てという項目は出てまして、この子育ての中に教育は入っているだろうと我々は認識しておいたんですけども、なぜそうなったかということ、冷静に考えて、単に教育と打ち出して、「vs東京」っていうとちょっと厳しいんじゃないのかというのがタスクフォースの面々の気持ちの中にあっただのではないかと。教育資源とか教育環境っていうのは、日本で一番有名な大学も東京にあって、圧倒的に偏差値も東京が高いんじゃないか。なかなか教育資源の都市部集中の中でそれはどうなんだろうと思ったのと、失われた10年だか20年だか分かりませんが、教育頑張っ、一生懸命勉強してもたいたことないでえ、みたいな、仕事就け

てないでえ、ニートばかりでえ、みたいな、努力が報われない社会というのがなんとなく意識の中であって、教育というのをストレートに打ち出しにくかったというのが、この10項目を眺めてちょっと思ったところです。

しかし、教育にかける期待というのは非常に大きいと思いますし、この総合教育会議がはじまったきっかけは、いじめの事件だと思うんですけど、あの時、僕の大学の同級生で中学校の先生とか小学校の先生とかいて、いろいろ話をしたんですが、教育、大丈夫なのかって話をしたんですけど、教育だけの問題じゃないよと。これはもう国挙げて県挙げてやらないとこんなの無理だよって。僕ら先生にこれ以上どうしろっていうんですかって、かなり言われまして。そうだなと。だから行政も頑張らないかんじゃないかというのを思ってたところ、総合教育会議の制度になって、それはやっぱりそうなんだろうということを持った次第です。

教育分野における地方創生は、まず教育の現場というか、教育っていう環境を産官学金労言挙げて地方創生にシフトチェンジしていく。その結果、教育現場が改革して変わっていけば、その教育での人づくりによって、さらに地域の地方創生、あるいは日本の地方創生に繋がっていくんじゃないのかということで、「地域と共に、徳島の『未来』を育むこと」を、これを11番目の宣言ということでタイトルにも掲げました。是非、大綱の中でこの要素を活かしてほしいなというのを言おうと思ってたんですけども、皆さんの発表を聞いていると、なんとなくそれはもう入ってくるのかなあと思いました。

あと、規模の経済と範囲の経済ということで、今まで大量生産でスケールメリットを活かして、いっぱい同じものを作って企業がどんどん業績を上げていくというのが、割と閉塞感というか、諸外国、東南アジアとか中国が頑張らだして、それが厳しくなってきた、今、範囲の経済というか、高品質なものをいろいろ揃えていって勝負していくっていう経済活動に変わる中、統治機構というか、この世の中のあり方も同じように人口が少なくなっていく中で人をいくら集めても限界がある。その中で多様性を育て、いろんな人がいろんな所で競争して頑張っていくというのが地方創生じゃないのかということを考えています。

教育分野における地方創生というのは、都会にできない、地域だからこそできる教育の展開。教育に地域の活力を入れていく。それが「vs東京」の要素でもある。その結果、教育現場を中心に産官学金労言が力を結集して、次代を担う人材を育成していくというのが地方創生の教育じゃないのかと思っております。と言いつつ、これはほとんどi n gというか現在進行形で、いろいろ徳島県の取組っているのは既に進んでいて、全国をリードするような取組がたくさんあって、そういう流れにもうなっているのではないのかと私自身は考えております。

未来を育むこととはどういうことかということで、まず4つ書きました。能力を育むとして、世界に通じる人材育成、当然、能力を育むのは教育の中心的な話だと思うんですが、ここも都会的なというか、大きな教室に人がたくさんいるという予備校みたいに勉強するんじゃあ、ちょっと徳島じゃないよね、あるいは地域のカじゃないよねということで、英語村の絵も入れましたけども、コミュニケーション能力とか、そういうものも含めて、地域と一緒に優秀な人材を育てていくんだというのが大事なのかなと思っております。

それから右のスライド、地域で育む、これは写真は神山塾ですけども、ここは教育現場そのものとは少し離れる話ですが、神山に入ってきた若者たちが、とうとうホテルの経営にまで走ろうかというくらいどんどん地域と一緒に勉強をして、そこで起業をしてという活動が既にあって、地域の中に学生とか児童、生徒が入って行ってやっていくというのがこれから大事になってくるのじゃ

ないのかなと思っております。

下のスライド、多様性を育むです。範囲の経済というか、地方創生になって、勉強だけでできても、あるいは勉強だけでできる子がいても、という時代じゃないのかなあと。いろんなことができる子がいろんなどころにいるのがたぶん強い社会をつくるのじゃないのかなあと思いました。ときめきダンスから阿波踊りまで、徳島県にはたくさんの文化があって、スポーツもあって、ラフティングの世界大会をするくらい自然もあって、写真はお遍路ですけども、最近、子どもさんもされるので、おもてなしの心とか、こういうのも身につけていくようなものがどんどん教育に取り入れられていったらいいのかなと思っております。

4番目、夢を育むです。これは一番大きい話で、徳島の人間が頑張ってもたいしたことないんじゃないのかなと僕は学生の時に割と思っていました。それは都会に行ったら負けるだろうと最初から敗北感を持っていて、ビルの高さで負けてるからかみたいなところがあるんですが、徳島から出て行って、例えば東京で、あるいは世界で頑張ってる人がこだけいるんだというのをもっと学生が感じて、それは勉強ができなくてもいいと思うんですよ。なんかの分野でこんなにできてる人がいるんだというのをもっともっと知ってもらわないと、いくら頑張ってるって、っていうさっきの閉塞感に繋がっていくんじゃないのかなというのが気持ちとしてあります。

ということで徳島県としては「地域と共に、徳島の未来を育む教育」を、我々「vs東京」のタスクフォースとしても応援したいと思っております。どうぞよろしく申し上げます。

#### <飯泉知事>

加藤係長さん、ありがとうございます。松重委員長さんからご質問がありました「vs東京」秘話、今、お話があったとおりでありますし、また、総合教育会議が非常にタイムリーであったという話もできました。また11番目のvs東京宣言として教育を冠したものをガツンと入れようという話も出たところであります。ちなみに今、加藤係長さんから出た、勉強ができるっていう言葉があったんですが、さきほど出てきた某大学であります、あれは勉強ができるというよりもテストができると。本当の意味で頭がいいわけではないし、また勉強ができるわけでもない、実感として。そうしたことを考えますとね、やはり加藤係長さんが言われたように、本当の意味の勉強ができるということは、それぞれの与えられた境遇でどれだけ力を発揮できるか、その生き抜く力を持っているかどうかというのがおそらく本当の勉強ができるということなんだと思います。これも実感でありました。どうもありがとうございました。

それでは今日は6名の皆様、積極的にご提言をいただきましてありがとうございました。おそらく各教育委員の皆様方にもなるほどといった印象をお持ちいただけたのではないかと思います。それぞれの分野でこれからも大いに頑張ってくださいたい。そして、勉強するんだったら徳島に行こうと、いろんな形でグローバルは徳島だと言っていただけのように、これからもご活躍いただけたらと思います。どうもありがとうございました。

それではここからは、ただいまいただきました6名の皆さん方のご発表も含め、各教育委員さんからご発言をいただければと思います。前回、いきなり委員長さんいってしまいましたので、委員長さんは最後に言っていただくということで、委員さんから発言をいただいて、ラス前で教育長さんに、そして最後に委員長さんにと、こういう感じでいきたいと思っておりますので、それでは最初に、西委員さんからお願いをいたしたいと思っております。

### (3) 意見交換

#### <西委員>

はい、よろしくお願いします。ちょっと今、6名の方の発表を聞いて、活動が、非常にいいなというか、繋がったなという感じがしました。最初にしゃべられた植本代表、僕も実は東京に17年間いて、それからこちらに帰ってきたもんで、徳島の良さってすごく、子どもとか高校時代までこちらにいて、それからずっと東京に17年間いて、で、帰ってきてすごく再認識したというか、これだけすばらしい環境があるのか。だからまあ、規模とか業界は違うにしても、ミッション一緒かなという気が非常にするんですね。どうしても僕は会社経営をしてますけども、実は教育委員って、子どもがね、小学生と中学生がいるんです。その立場で教育委員に入ってるんですけども、やはり環境的にはこれだけすばらしいところはない。教育っていうのは、もちろん子どもの教育も含めて、やっぱり社会人の教育ですよ。なかなか、うちの社員の教育って一番会社経営の中で力入れているところなんですけども。まあ、環境としては非常にすばらしい。最後に加藤さんが言われたところに通じると思うんですけども、うちの会社のミッションがですね、徳島から世界へファインパーツの極みを発信する、世界で一番のもの作りになろうぜ、1個2個そういう製品が、世界で作れないだろうなってあるんですよ。で、作っている人は科技高の出身の人で、とかね。全部繋がっちゃってるなってところありますけど。

濱田先生のところで非常に感心したのは、成功体験なんですね。新入社員にしても中途社員にしても、うちの会社、採用試験では適性検査をします。その中で一番低いのが成功体験です。やる気があったりだとか、チームワークがあったりだとか、自分が憧れたりだとか、そういうのいいなってあるんですけども、やはり高校生ぐらいまでに成功体験、あるいは大学のゼミでもいいんですけど、それ積んでない人間っていうのは非常にね、社会に出てからも自己嫌悪だとか自己卑下だとかいったところに落ちやすいんですよ。そういうところに行きやすいので、やられていることっていうのは非常にすばらしいなというふうに思いました。

それとまあ、次、大久保先生なんですけど。23人卒業生が、はい、一人がうちに入ってます。もうほんとにね、すばらしいんですよ。何がすばしいかっていったら相互成長ですね。彼も、卒業生である、4月に入ってきた彼もそうなんですけど、一緒に働いている仲間の成長がやっぱりすごいですよね。お互い、だからその、なくてはならない関係になってるし、もの作りですから、非常に安全を一番大切に、いろんな標準とか基準とか作っていくんですけども、彼がいたお陰でね、作れたものが非常に多いんですよ。うちのリーダーが言ってました。「彼がいてくれたお陰で、この基準書とか標準書を作れたんです。でも本当は僕らにとって、これって一番大切なものだったんですよ。」そういうストーリーも、非常にいろんなストーリーが、今、出来つつあるんで。それは就業体験に来てくれた去年とか一昨年から始めたもので、非常にそこがすごくよかったなと思ってますし、ますますうちの会社の中でも、障がい者交流についてはどんどん進めていこうというところが、やっぱり成功体験ですよ、といったところが、うちの会社でもたくさん起こっています。

福田先生に関しては、何がすばしいかというプロセスです。このプロセスを考えるっていうのはなかなか、学校の先生でもこういうプロセスをね、こう組み立てていって目標に向かってこれからの実践、生徒のためっていう一番に回すのがプロセスがね、ありますよね。これはなんかね、やっぱりストーリーをね、考えて、目標に向かってというかプロセスも考える、思考する力が非常にすばらしいというふうに思います。

尾崎先生には、ほんとに毎年2人、3人お世話になっております。今年も是非よろしくお願ひします。で、尾崎先生の言葉として非常に力強かったのが「貢献する」。社会貢献って、一番最後に貢献がこないと、生きがい働きがいというのは生まれなないと思ひます。力強く「これは貢献だ」と言われてたので、これからも繋がりをもっともっと深めていきなないなあとこのうふうに思ひてます。

で、最後の加藤先生です。あ、そこまで僕、実はね、何回もビデオ見ましたけど、考へていたのかな、このうところですよ。逆に言うると、教育委員としてもこのうですけど、うちの会社としてもですよ、いろんなことをやって、今回の発表を聞いてですよ、どんどんいろんなこのうで繋がりていきなないなこのうに思ひています。また今後ともよろしくお願ひします。どうもありがたうございました。

### <飯泉知事>

どうもありがたうございました。それでは次に、田村委員さんよろしくお願ひいたします。

### <田村委員>

はい。いろんご発表ありがたうございました。先生方、ほんとにもうすばらしいお話ばかりで、徳島県の先生方のレベルは非常に高いなあって思ひました。全ての先生方が、そのぐらいの気持ちを持ってやってくださったら、徳島県の子もたちは幸せだなあってこのうふうに思ひました。先生方それぞれの、地方再生のためにイメージを持ってらっしゃるので、そのイメージをほんとに実現できるこのうに、周りのみんながサポートをしていけるこのうな形が出来れば変わっていきなないなこのうふうに思ひました。ほんとは先生方、非常に悩みもいっばいあるんだと思ひますけど、そのこのうところは伏せて、今日お話をしていただいたと思ひます。ほんとにご苦労様でございます。

で、最初の話をしていただいた植本さんですかね、非常に興味を持ってお話を聞いたんですけども、東京からいらしたってこのうことで、徳島の魅力、自然がほんとに魅力であるこのうふうに思ひてくださって、三好の方ですか、カフェ、生き方としては私はすごくこのうの好きなものですから、一度行ってみたいなあと思ひます。で、私も自然がとても好きなんですよ。でも今、人間が自然と非常にかけ離れた位置にいる、で、教育も離れている、このうふうに思ひています。

これも10年前の話でちょっと古いんですけど、私、ゼミの学生と上勝の方で、上勝の小学校の子もたちを連れて山へ、それは上勝の森林組合の方と一緒にだったんですけど、山へ行って、この木の成長を自分の成長と比べたり、間伐や枝打ちを見学して木に触れる学びを一緒にやっったことがあるんですけど、子どもたちに山の土に触れる体験をしてもらおうと、「この木の下にはいろんな生き物があるよ、掘ってみよう。」って言うても、「汚い」、「汚れる」、「お母さんに怒られる」、もうどうしようもない。本当にこれが現実なんだなあって思ひて、これを解消しないと、きっと自然と触れる楽しさや価値を分からせてやれない、自然の豊かさが徳島の財産なんて絶対に思わなないと思うんですよ。で、まず子どもを責めるんじゃない、これは林業をしてる人や大人の私たちをもっと責めなないといけなないな。もっともっと自然、人間も自然の一部なんだこのうところから出発なないと、今の時代、きっと自然への理解は難しいと思ひます。で、そこら辺をほんとに、豊かな自然や美味しいものがある徳島、これは自然が育んだ宝物であるこのうのを、もっと教えるために頑張らなないといけなないな。

で、今日、先生方の発表者の中に、幼稚園の先生と小学校の先生がいななかったんですけど、私はいつも思うこのうに、やっぱり教育の原点は幼少時期にあると思ひます。県の教育委員会の定例会で話

しても、なかなか小学校とか保育の話っていうのは持ち上がらないっていうか、まあ、それは管轄外というんですかね。しかし人間の基礎教育の部分を、私はそこをもっと改革しないと無理でないかなというふうに思います。だからもっと、親や保護者、保育所、幼稚園、認定こども園になりますけど、それから、小学校、中学校、高等学校、そして大学、そして地域、これらが一体になって、意見を交換するような場とか、そういう機会をどんどんいろんな所で作っていく。そして、徳島ブランドの人間形成のイメージを共有するというようなことを、たくさんしないとダメではないかなあというふうに思いました。イメージが出来ないと、キャリア教育とか言ってますけど、将来どういうふうにこの子が育っていくんだろうかなんて、なかなかイメージして教育してないんだろうと、忙しすぎる教育現場は、今の学習指導要領に沿って指導するだけで精一杯というのがあるんじゃないかなと思うんです。だから、教育の現場だけでなく、それぞれに生きてるすべての県民が、本当に徳島の子どもの将来を、人の幸せな生涯をイメージしながら生きる、そしたら、幸せな生き方がこの徳島で出来るはず、それをウリに出来ればいいんじゃないかなって思いました。どうもありがとうございました。

#### <飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは三牧委員さんお願いいたします。

#### <三牧委員>

失礼いたします。ご発表くださった先生方、本当にすばらしいなと思いました。私も元教員をしておりましたので、もっと頑張ればよかったなあと反省することしきりでございます。でも、ほんとに学校教育がこれから未来に向かって、こんな先生方が、こんな思いで教育に携わっておられることを、とても力強く感じましたし、このような先生方がもっともっと増えていってくださることを期待してますし、私たちも、もっともっと努力していかなければと思いました。

私は、前回の総合教育会議のときに、学校の教師あるいは学校が、大変自信を失っているという話をしました。それは、一つは学校や学校教育の中における、あるいは教師の中における閉塞感があり、そういったものが夢を語る教師や子どもたちが少なくなっているというようなところに繋がっていくのではないかと思ったりしていました。今日お話を聞いたり、それから「vs東京」に代表されるような地方創生の動きの中で、もっともっとやれることがあるという希望を持っています。やはり夢を語るこれからの方向を求めていくということ。やはり地域や、社会全体が希望を持てるような状況になるということが何よりも大切なのだと思います。やはり、社会全体が活力があって、仕事もあり、収入も安定してる、それから自然環境が豊かで、いろいろな社会の状況、地域の状況が活性化されて豊かな状況であるということが教育の活性化に繋がり、夢を語る子どもたちを育てていくことに繋がると考えます。今回の総合教育会議で定めようとしている教育大綱の中には、そういった、地域が生き生きと活性化できるような、そういった基盤の上に教育を考えていこうということが盛り込めるといいなあと、私個人的には思っています。

私自身、退職してから、男女共同参画活動をしたり、それから国際交流というか、海外研修などの活動もしていますが、教員をしてた頃よりも世界が広がったなあという気がしています。それはやはり、教育関係以外の地域の人や、様々な分野の仕事をしてる人などと、いろいろお世話になって関わりを持ったんですが、そういった世界が広がるということが、大切なのだと思います。学校教育の中にも、そういった新しい世界をどんどん取り入れていく、学校の中だけでものを考えるの

ではなく、もっと広い地域社会、あるいは世界へ繋がっていく、今日発表してくださった先生方のような視点でもって、これからの子どもたちの教育について考えていく、そういった方向性を持っていくことが大事なのではないかと考えています。

それと同時に、やはり地に足をつけるというか、何といたっても子どもに学力をつけ、ものを見る力、考える力、それから、自分はここに足をつけているという、子どもたち自身のアイデンティティをしっかりと育てる、皇后様が、「自分の根っこ」という言葉で表現されていましたが、根っこがしっかりと育っている人は、どのような場面に出会っても、揺るがない自分の希望や目標に向かって苦勞を重ねながら進んでいける、そういう人間に育っていくのだらうと思いますので、やはり小さいときから、学力をつけ、地域を知り、自然に親しみ、いろいろな体験を積み重ねていく中で、しっかりした考えを、行動を身につけていけるような子ども、そういったことも盛り込んでいけたらと思っています。大変概括的な、とりとめのない話になったのですが、希望としては、そんな気持ちを今とても強く抱いています。すばらしい発表ありがとうございました。

### <飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは佐野教育長さんお願いします。

### <佐野教育長>

今日発表いただいた全ての皆さん、大変お疲れ様でした。まず、植本社長さんの話ですけども、三好市の出合というところでやってらしてお聞きしております。ご発表の中で、神様との距離が近いということでしたけれども、実は私は、そこから1時間ほどかかる東祖谷の生まれでして、そこで中学校まで過ごしまして、植本社長さんのおっしゃられたような、理想とする育ち方をしました。実は山の子ってみんな泳げるんですね、川で泳ぎますから。みんな泳げますし、山の植物で食べられるもの、食べられないもの、キノコでこれ食べると死んでしまう、みんな分かります。で、遠足はお弁当持って、住んでいるところが標高500メートル、600メートルですけども、千メートルぐらいの山に上がっていくんですね。そこで弁当食べて帰るだけなんですけど、そんな時代でした。で、神様が近いっていうのがすごく分かったのは、ちょうど、今ぐらいの時期に雨が上がると、緑の中ですごくまあ、何というか、そこに神様がいないんじゃないかというような、そんな育ち方しましたし、新月の夜は隣にいても、私と田村先生ぐらい近い人も見えない、まわりつくような闇の中で過ごしていたようなことを思い出しました。まさにそれが自然かなっていうことです。小学校6年生まで信号見たことありませんでしたからね。で、小学校6年生のときに修学旅行で小豆島へ行きまして、小豆島の土庄港で連れて行ってくれた先生が、「じゃあ皆さん手をつないで、海の水を舐めてみなさい。」「しょっぱい!」「そうでしょう。」って。で、そこで僕はひらめいたんですね、鯖とか、鯛とか、イカはみんなしょっぱい。で、高校になって、それは違うっていうことが分かった。おかしいぞ、漬物は塩に漬けたら辛いじゃないか、そういうところで育ちましたので。それから、尾崎先生の先輩になって工業高校行って、東京で首都高速作ってたんですけども、これも毎日阿波踊りだなあというふうに思っていました。それからまた、徳島に帰ってきて教員になりました。今思っているのは、いわゆる、この言い方が正しいかどうか分かりませんが、県外をベースに生きてきた方に徳島の良さを知らせていただいている、それをやっぱりこう、良かったなど、それをものにしないと我々何をやってるんだ、というふうに思っています。まず一番目にそれを感じました。

あと、加藤係長の発表のときに、「vs東京」の中で一番最後の方に「能力をはぐくむ」のところで、リーディングハイスクール、中高一貫教育、グローバル教育、コミュニケーション能力、いろいろなことを書いていただいているんですけども、英語村を始めて、徳島が先んじて取り組んでいるということも評価していただいたし、もっともっと頑張らないかなと、そしてもっと自信を持たないといかな、とっております。

そして、発表していただいた4名の教員の方々、もちろんここで発表するんですから優秀な教員をお願いしてるわけですが、こんな言い方をすると失礼ですが、期待以上の発表をしていただいて、期待以上の取組みをされているなど、元気をもらいました。

知事から現場目線ということで、去年と一昨年かけて、全ての学校を副教育長と一緒に回りました。その時に感じたのは、私が現場で教員をしてたときよりも、先生方頑張っているなど。例えば、英語で授業をっていうたときに、私は正直に学校では英語でっていうか、日本語でも一生懸命やっても頑張るのはどうだ？って正直思ったこともあるのですが、ちゃんと英語で分かるような授業をされてるんです。一方で尾崎先生がおっしゃられたように進学も、それからいろんな特別支援も専門高校も頑張っているなどと思います。そのときに、私自身が印象に残ったのは、三好高校の農場に行っていて、夕方行ったものですから、非常に、冬行ったもので寒くて帰ろうと思ってたら、そこに女生徒が2人いまして、その子たちは鶏卵、卵を持ってきて、それに糞がついてるのを洗って、ずっと洗ってたんです。で、一つ一つ包んでたんですね。で、「寒いだろ、辛いだろ？」、「いいえ」って。「なんで？」、「月曜日には近所の人がこれ買いに来てくれるんです。楽しいですよ。」って。で、帰りに車で横を通ると、スマートフォンいじりながら、手をつないで帰っていくんですね。そのときに、この子たち愛しくて、抱きしめてやりたいなっていうぐらい思いました。

教育っていうのはいろんなところでその場面、ほんとにまあ、大学行かせることもそうですし、そういう両方の場面があっていいし、その場面場面で頑張っている教員もいるし、学校ってそういうもんだなと思って、意を強くしたところはあります。ただ、これから先に我々に求められているところっていうものを考えますと、先ほど知事もおっしゃられましたが、本来の学力とは何かと。で、勉強が出来る子っていうのは何かと、いわゆる与えられた学習教科ができることじゃなくて、本来生き抜く力、自分で知恵を働かせて生き抜く力っていうものを求めるっていう方向性があるんじゃないかということが一つ。

もう一つは、具体的な話なんですけれども、教員としてですね、これまでは、教育内容と政治の世界というのは少し離れていて当たり前という世界だったんですが、教育内容というものではなくて、教育そのものの中に求められていること、それは、県であったり国であったり、今、地方創生が叫ばれてますけれども、そういった中で教育もそれに敏感に反応して応える必要がある、それは時代の流れですので、そういうことに反応しなければならないし、そういう意味では教員の意識を変えていかなければならない。そういうことが大きな課題として浮き上がっているんじゃないかと思っております。そこのところの意識改革がやはり必要かなと。与えられた任務と使命というものの中にそういうものを取り入れていくべきではないかと思っております。そうすると、徳島の先生方も、元々力持ってるわけですから、それで今、求められている地方創生、教育なら徳島で、っていうものについても出来るんじゃないかと大いに期待してますし、そうあらねばならないというふうに思ってます。総合教育会議が一つの契機として、そうしたことが現場の先生方に浸透すればいいなと思っておりますし、そんな期待を持っています。以上です。

## <飯泉知事>

ありがとうございました。それでは松重委員長さんお願いいたします。

## <松重委員長>

6名のプレゼンターの方、ご苦労様でした。私の方からは少し抽象的かもしれませんが、まとめてお話ししたいと思います。教育にはいろんな視点があります。学力、体力、いじめの問題もありますし、障がいやどう克服するかということもあります。今日は前向きというか、教育の一つの方向性として、いわゆる夢を持った若い人をどう育てるかということを考えてと思います。今日の皆さんのプレゼンで一つ気付いたのは、子どもに夢を持つというのはあるんですけど、それに加えて皆さん方自身が夢を持っていること、そこが重要じゃないかなと思いました。教師も夢を持ってそれを実現する、その姿勢がないと夢を持った子どもも育たない。だから、夢のモチベーションと言いますか、夢をどう育てるかっていうのが重要です。それは自分たちの体験であり、それから郷土の誇りであり、いろんな要素があると思います。で、それぞれの子どもがそうしたものにチャレンジできるような状況を作るというのが、大きな意味での教育の役割かなと思います。

現実の課題としてはいろいろあります。学力とか体力については対処法なので、それはそれなりに出来るんですけど、やはり徳島の一つの大きな特徴といえるのは、そういうチャレンジをやるということ。まさに「vs東京」はチャレンジだと思うんですよ。まあ、ほかから見ても、私も冷静に見て、すぐには、東京対等とはならないと思ってますが。やはりチャレンジ、夢っていうのは、ワンステップじゃなくて、これは私が教育委員長になったときに先生方に言ったんですが、ツーステップ先を考えて、いろいろなものにチャレンジしてくださいと。ワンステップ先、直ぐ上のレベルというのは見通しが出来るわけですよ。それはこれまでの経験でも実現の可能性が高いんですけど、ツーステップというのなかなかですね。どういうふうにしたらいいとか、どう対処したらいいか見当もつかず、ツーステップ先の目標となるとやはり試行錯誤です。それから今日もいろいろ体験の話があり、そうした成功体験的なものは必要なんですけど、もう一つ重要なのは失敗体験なんです。私もこれまでベンチャーの育成をやってきましたが、その中で一番成長した人というのはやはり失敗を体験した人、そうした経験をしないと大きな成長にならない。つまり一度失敗すると、それからどうするかって学ぶところがたくさんある。だから共通するのは、やはりチャレンジするというか体験するっていうことをやらないといけません。ところで、県政は失敗できないかもしれませんが、失敗を厭わなくらいのものがないと、私は「vs東京」というのはちょっと言葉倒れになる可能性がある、それは教育についてもそうで、ちょっと精神論的なことを言っていますが、やはり重要なのはそうした失敗も恐れずにチャレンジかなという気がします。

それから、英語の話がありました。私は英語教育での目的は、英語そのものではないと思います。今の英語教育の主体は、英語を習うというか、対処法というか勉強法ということなんですけど、そうした考えで良いのか？私にも留学の経験があります。で、そこで分かることは、英語っていうのは生活の手段であり、自己発現というか、自己存在のものなんです。例えば、ニューヨークに行ったときにですね、私は日本人で英語が話せない、これは自分の考えであって、周りの人は、いろんなところから来ていますよ、彼らは、相手は日本人だから話せなくてもよいと思ってくれるのではなくて、それはもう話せるのが当然として対応するんですよ。話せるっていうのは必ずしもフルーエントに話せるのではなくて、自分を表現できるという意味で、生活の手段としての英語。言語っていうのはそうだと思います。そういう実体験を早い年齢でするというのが重要だし、そういう

機会を我々が提供するというのが教育上でも重要なと思います。

もう一つはチャレンジということについて。世界で有名なベンチャー育成や輩出が盛んな場所としてシリコンバレーがありますね。シリコンバレーには、スタンフォード大学があるんですけど、このスタンフォード大学っていうのはもともと農学校というか、農村にあった大学なんです。シリコンバレーでのスタンフォード大学の位置付けを考えたとき、私は徳島も同じような状況にあるなと思います。スタンフォード大学の卒業生がどこを目指していたか。一番近いところがサンフランシスコ、そして、最大都市がアメリカ東部のニューヨーク、ワシントン、ボストンです。そこは日本でいうと東京なんですね。で、サンフランシスコは関西で、まあ大阪であり、京都であり、兵庫だと。徳島はそれからちょうど1時間ぐらいのところ、シリコンバレーとサンフランシスコと同じような距離感なんですね。つまり、真ん中にいるとチャレンジというものが埋まるわけです。いろんなものは少なくともある。だけどちょっと離れたところから冷静に見て、最も繁栄している都市、世界を目指すという形であればチャレンジとなる。まさに徳島はそういう位置づけだと思うんですね。目標を単に関西目指す、東京目指すというのものもあるんですけど。やはり、イノベーションを含めてですね、世界を目指す心意気が必要ではないかと。これはまあ、目指すんですから、実現できるかという疑問心が先行するのではなくて、チャレンジしようとする勇気が必要では。そういうふうなところを、小さな子どもでもですね、チャレンジすることの重要性を教育の中にも入れて行く。そうすると、先生方もそうしたサポートをしなければと思っていただけるのでは。

子どもたちは教育という中で、順当な形で成長すると思うんですよ。ただ、それだけではあんまり良くはない。良くはないというところちょっと言い過ぎかも知れませんが。あんまり順調な子というのは、極めて大きく成長はしないと思うんですね。やっぱり叱られて、それから失敗して、友達と喧嘩して、そんな中でより大きく育っていくということであればですね、先生方もやはり教育方法にもチャレンジをしてほしいかなと思います。そういうものをするっていうことが、「vs東京」の中の精神だと思うんですね。さきほど、加藤係長さんが言われたように、夢をはぐくむというか、その中に具体的なものを我々がしないといけない。精神的なものとしてはそういうものがあればなと思います。地方創生はどこでも同じように競ってやっていますけど、やっぱり徳島はツーステップ先のことを見据えてチャレンジするというのが必要では。

もう1点言わないといけないのは、グローバルと言ってもやはり自分を語れないといけないし、自分の郷里が語れないといけない。いわゆる郷里愛というふうなことを教育の中に入れてはと思います。郷土で育った偉人の話もありますし、失敗した人のもあるし、歴史や豊かな自然もあるし、そういったものを含めて、人が成長できる要素が徳島にはたくさんある。チャレンジ心に富む人を育てる度量があるというのが、私は徳島の特徴かなと。精神的なものかもしれませんが、私はそういうところも是非盛り込んでいただければと思います。

### <飯泉知事>

どうもありがとうございました。さきほど発表いただいた6名の皆さん方には時間の制約もあったと思いますので、せっかくの機会ですからここでひと言ずつ、さきほどは植本社長さんからいきましたので、今度は加藤係長さんから順々に、順番逆にして、ひと言ずつ、ひと言じゃなくても結構ですからどうぞお願いします。

### <徳島県政策創造部地方創生推進課 加藤係長 (vs東京タクスフォースマン) >

いろいろなご意見ありがとうございます。子どもたちが頑張れる環境についてですが、僕も子どもが小学校2年生になるんですけど、子どもたちが家に帰ってきて、うちの娘は先生がすべてなんですね。先生が言ったことが正しい、お父さんが言ったことは間違っていると。やっぱり子どもたちはそういう感じなので、学校現場っていうのはそういうとこなんだよってことで、先生方には頑張っていたきたいし、家庭とかあるいはそれ以外の社会っていうのもそれをどんどん支えていける、学校任せにすぐしちゃうと、最後は学校がってなって、先生方にとってもそれはものすごく負担だと思うんですよね。いじめがちょっと起きて、先生がよくないからってすぐに言っちゃうとよくないので、そこは家庭が、地域が、そして行政と一緒にできるっていうのが地方創生の、まずそこが第一歩かなと思っております。お願いします。

### <飯泉知事>

ありがとうございました。それでは尾崎先生どうぞ。

### <徳島県立徳島科学技術高等学校 尾崎教諭>

失礼いたします。回ってくると思わなかったので、あんまり何も考えてはなかったんですけど、私、最後に、「徳島の魅力はどこですか、と聞かれたらどうしますか。」ということ、常々考えて、じゃあ自分が聞かれたらどうしようかなということ、いつも考えてるんですけど、これはまあ自慢できるかなと思うのは、私の実家は、家を出て30秒ほどで、すぐに海に飛び込めるようなところです。で、どの県に行っても魚を食べると、やはり徳島の魚が一番うまい。これは徳島の魅力じゃないかなというふうに感じてます。最近ニュースでもちょっと取り上げられてますけど、オオちゃんが最近出没してますので、もうちょっと出てきてくれて、もっともっと全国に放送してくれると地元が有名になるかなと、ちょっと思ってます。そのぐらい徳島好きなんで、まあこれからも子どもたちが自慢もって魅力ある徳島だなあと感じてもらえれば、教育を実践できたかなと考えています。ありがとうございました。

### <飯泉知事>

ありがとうございました。それでは福田先生どうぞ。

### <徳島県立城ノ内高等学校 福田教諭>

失礼します。先日ケンブリッジの研修の事前研修に行きましたときに、素晴らしい言葉に出会ったんですが、それが、「Tell me and I forget, show me and I understand, involve me and I remember.」っていう言葉だったんです。英語を実践する教育の手法を学ぶ教えなんですけれども、これって英語を使って人が繋がっていく、コミュニケーションとして人が繋がっていくための一番大切なものなのかなあということを感じました。私は英語の力を伸ばすだけではなくて、英語を通してそれを使って何かすることを目的に考えられるような生徒を作りたいなと感じています。昨年度、知事が作ってくださった英語村に、昨年度まで務めていました川島高校の生徒がありまして、彼は経済的な面から地元の市役所の方に就職が決まっていたんですけども、やはりあのときのすごく良かった思い出が忘れられなくて、また1年頑張っておエジンバラ大学の方に行きたいというふうに、思いを語ってくれました。我々教員は、ともすれば生徒の進路を決めることを急いでしま

うんですけれども、ゆっくりと回り道をすることも生徒の豊かな人生に繋がるのかなと、生徒に教えてもらったこともありました。そういった面で、広い視点で、いろんなことを学んでいきたいと思います。今日非常に勉強させていただきました。ありがとうございました。

#### <飯泉知事>

ありがとうございました。それでは次に大久保先生お願いいたします。

#### <徳島県立みなと高等学園 大久保教諭>

今日はこういう時間をいただきましてありがとうございました。なかなか特別支援教育ということでお話させていただくような機会も少ないんですけども、卒業生が西精工の方でお世話になっておまして、本当に地元の方たちに助けられ、様々な経験を子どもたちがさせていただいて、しっかり働いてくれるっていうのが、とても有り難いと、今日改めて思いました。さきほど言っていたように、彼がいるから皆が成長するというようなところもあったと思うんですけども、本当にそれを目指して、私たちこれからも頑張っていきたいなあというふうに、改めて思わせていただきました。本当に今日はありがとうございました。

#### <飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは濱田先生お願いいたします。

#### <徳島市城東中学校 濱田教諭>

失礼します。まだ大学を出て4年間しか経ってなくて、ほかの先生方に比べて関わってきている生徒もすごく少ないんですけども、このような機会をいただき、自分の目標としているものをもう一度見直すことも出来ますし、これから育てていきたい生徒像というのがしっかり見えてきたなと思います。委員さんたちのお話にもあったように、夢を持つ子どもを育てたり、チャレンジを出来る子どもを育てたりっていうのがもちろん大事なんですけど、子どもたちを見ていると、語る、自分のことを語る、夢を語る、自分の考えを表現するっていうことがすごく苦手やと感じている生徒が多いなと思いました。その中で、私自身このお話をいただいたときに、自分が相談した友達がいて、その友達は2人とも先ほどのスライドに出てきたソフトボールを一緒にしていた2人で、同じように教員をしている2人なんですけど、夜中の1時2時まで夢について3人で語っている自分たちの姿を見直したときに、何かを語れるっていうのは仲間が必要で、自分一人では何かを考えたりとか、何かを達成したりとか、夢を持ってもっと頑張りたいって思うことも難しいかなと思うんですけど、繋がっている、一緒に頑張っている仲間がすごく大事なかなと、自分自身を見つめ直して感じました。これから子どもたちを育てていく中で、英語力をつけてこれからのグローバル化社会に対応する子どもたちを育てることはもちろんなんですけど、その中で、授業の中で仲間と繋がり合うこととか、何気ないことでも語り合える仲間とか、悩みを相談できる仲間っていうのを、これから子どもたちと一緒に作っていききたいなというふうに、改めて感じました。ありがとうございました。

#### <飯泉知事>

ありがとうございました。今、大学出て就職して4年くらいだというお話があったんですけど、

逆にそれがまた重要な経験でしてね。つまり生徒さんに一番近い存在なんですよ。だんだんね、生徒さんの気持ちから離れていく。先生としてはベテランになるんですよ。生徒の気持ちがだんだん捉えられなくなってしまいうってことがある日突然、おそらく起こると思うんですよ。そうした意味ではフレッシュな感覚、それを忘れないでいていただきたいと。

我々、行政をやったり政治をやる場合そうですが、特に行政の場合には、いろんなフェーズフェーズによって、例えば小学生をターゲットにする行政、中学生、あるいは高校生。もちろん成人の男性、女性とか高齢者とか、それぞれフェーズが分かれてくるんですよ。そのときに小学生向けって、ただ単に名前だけ小学生っていうのは意味ないわけですし、じゃあ小学生の感覚ってどうなんだろうと。そうしたときに自分の小学生時代をどう思い出すかっていうね。さきほど成功体験とか失敗体験とかあったんですが、私は今以て小学生の時の感覚ってずっとあるわけなんですよ、幼稚園くらいからずっと。それはなぜかという、今日は総合教育会議ですから、あまり物議醸し出すといけないけど、愛読書は何ですかって必ず聞かれるわけですよ。きっと難しい法律書とかニーチェとかみんなそういう期待をしているんだけど、実際はね、高校行くとみんな万雷の拍手になるんだけど、少年ジャンプなんです。幼稚園の時からずっと読んでるから今以て同じものなわけ。だからその時におぼえた感動ってそういうものが残るわけね。ジャンプを見る度に小学校、中学校、高校、大学、就職してからとその時の思い出がよみがえる。あの時、なんていう漫画があったか、それを思い出すだけでその感覚が走馬灯のごとく戻ってくるっていうね。何かそういうツールがあると記憶っていうのは引っ張り出せるわけ。これ一例としてね、申し上げたところなんです、是非その感覚を忘れないで頑張っていたいただきたいと思います。

お待たせをいたしました、植本社長さん。妹さんのケーキも美味しかったですよ。ごちそうさんでした。

#### < (株) ハレとケデザイン舎 植本代表取締役社長 >

ありがとうございます。まず私の息子が大きくなったらこんなに素晴らしい先生がいるんだなあ、ととても楽しくお話を聞かせていただきました。そして、「vs東京」じゃなくていいと思っています。「vs東京」を意識しないでくださいと私は東京から来た人間として一番思ってるんですけど、正直、東京なんか見なくていいと思います。比べるものではなくて、もしvsというのであれば、世界とか地球とかっていう単位に代えてもらいたいなと思っていて、東京から来た人間としてはちょっと「vs東京」って出てくる度に東京にちょっと恥ずかしいなと思うときが実はあります。なので、正直なところなんですけれども、まったく意識して欲しくなくて、こっちにしかない、もっと自然とかそういったものの距離を縮めてもらいたいってということと、グローバル化、本当にこの素晴らしい英語の先生を間近に見てすごうれしかったです。なので、是非、vs世界を意識していただければなと今日、ずっとここにいて思っていました。ありがとうございます。

#### < 飯泉知事 >

どうもありがとうございます。今日、皆様方から、また教育委員さんからの話をお聞きをしていて、私も思った点が3点ほどあります。一つは成功体験という言葉が出てきました。我々が子どもの頃っていうのは様々な分野でヒーローがいたんですね。例えば小学校の時、テストができなくても学級対抗リレーで走るの速いっていうとだいたい女の子が一番モテるのはリレーの選手なんですよ。勉強全然できないのね、先生に怒られてばかりなんだけど。女子生徒には一番モテる。

運動会の花形ですよ。それはそれでいいわけだし。例えば図画工作の時に手の器用な子。先生の言うとおりにバババーと作っちゃうわけですよ。だいたいテストができる子っていうのはそこいわけですよ。きれいに作る子はそれはそれでヒーローなんです。何もできない子が逆にテスト一生懸命ガリ勉強して100点取ってようやくそこで褒められる。我々小学校の時っていうのはだいたいそんな社会。だからクラス全員例えば、当時は50人近くいましたけど、みんながヒーローですよ。ところがその後、高度成長の時代になってきて、どうもテストで点のいい子が先生にも褒められるし、クラスでも尊敬されるといって、日本全体が変な価値観になっちゃって、それが勉強ということになって東京大学とか京都大学に行く子が一番偉い子みたいな。だから私はよく言ったんですよ、そうじゃないって。一番才能が無いからテストでいい点取ってそういうところ行って箔を付けるしかないんだと。例えば、本当に手が器用でピアノが上手い、バイオリンが上手い子だったら、そんなことしなくたってコンクールで一等賞取れば、世界で有名なアーティストになれるわけですよ。例えば物を作る人たちも皆そうで、そういう世界でもやっていけるわけですし、あるいはアクターとしてアクトレスとしてやる。これもできるわけなんで、逆に言うとそういう才能が無くて、天賦の才が無くても努力する、そういう人たちが最後にようやくたどり着いて、本当はメガネかけなくてもいいのに目を悪くしちゃって、メガネをかけるはめになるわけなんですけど、それでも一応、そういう大学に行って箔を付けて、やっぱりヒーローになれる。だからみんなそれぞれの社会で持てるものが才能なんだと。もう一度、日本はこれを戻さないといけないんじゃないのかなあ。みんながヒーローになれる。そのために勉強をする。テストをするためのことじゃないですよ。そういう意味ではさきほどそれぞれの分野の先生方に発表いただいたんですが、専門高校であるとか、あるいは特別支援学校だとか普通科だとか、今、便宜上分かれています、ともすると偏差値の輪切りで考えてしまう。そうじゃなくて、それぞれが才能なんだと。例えば専門高校に行った子たちも大学進学を目指すんだと。逆に言うと普通科の子たちでも大学に行って、その後何も手に職が無くて就職できないのが今、やたら出ちゃってるんですよ。高校までは偏差値が良くてヒーローだった。大学もまあ行った。でも何もできない。これ就職できないと悲劇なんですよ。だから逆にそうした子たちも実践をやるということで、我々もインターンシップとかを一生懸命やるんですけどね。だからそれぞれを偏差値の輪切りをするのではなくて、その子の個性に合って選ぶ。どこもどこもそれぞれがヒーローなんだと。そういう価値観を教育委員会の中にもっともっと持ってもらいたい。ともすると偏差値の輪切りですぐ考えちゃう。こうした点は強く申し上げておきたいと思います。

それから第2点目。これも多くの皆さんが言っていた地域のアイデンティティー。これを子どものうちから身につけてもらうような、これも教育というのか、地域教育というのか、地域の誇り、地域学として教えるっていうのもあるんですが、教えるのではなく身につけていく。昔は高齢者の皆さんのところに子どもさんたちが集まって、地域の話をしていろいろ聞くんですよ。我々、戦争体験聞いたこともよくありましたが、そうした地域のこれぞっていうものを伝承として語り継いでいく。身につけていく。まさにそれが自分の素養であり教養だと。自分の立つ術なんだと。これがないと海外に打って出たときにこれほどみじめなものはないんですよ。まずテルミーなんですよ。自分のことをどう言うかって言わないと、相手は話のしようがないわけなんですよ。まず自分のことを言うてからの話なんですよ。じゃああなたの地域はどんなところなんですか。いやあ、うちは何もないしって、これを言ってしまうとね。後、特に言われるのが、あなたの宗教なんですかって必ずきくんですよ。日本人って割と、私、別に特になんないからって、うち仏教だし、

クリスマスになるとキリスト教になるし、ハロウィンもやるしみたいだね。これ最悪でしょ。最後にどこの宗教でもないって言うといきなり敬遠されるんですよ。無信教の人間ってのは一番敬遠されるっていうのが世界の常識っていうのが、意外と日本にいと分からない。海外に出てみるととんでもない話になるんですけどね。だからそうしたものをいかに早い段階で、自分はどういうルーツの人間なんだと。あとは夢をどう語っていくのかと。その土台をしっかりと早い段階から教えていく。さきほどおっしゃっていただいたように、神様に一番近い場所なんだと、これほどね、自慢すべきものはないわけで、東京、大阪の人間は神様に一番遠いところに住んでるわけですからね。そうした点を自分たちの誇りと思ってやっていくんだと。インターネットの向こうは世界なんですね。今、グローバル化なんて敢えて言ってますけども、ネットの社会では即、グローバル化になっているわけですよ。そうした点も教育の現場で、これは教育というよりも行政も加え、地域全体でどうしていくのかといったことになるかと思えます。

それと、教育委員長さんからお話のありました、チャレンジ。どうもこれも昔は失敗やたらしても、まあ怒られはしましたし、廊下に立たされたこともありましたが、それはそれでひとつのいい経験で、次は失敗しないぞと、次があったんですが、日本全体がどんどん豊かになると失敗することが許されない。あるいは失敗することは恥ずかしいことだというね、これは教育の世界もそうだし社会全体でも出てきちゃったんですね。だから失敗を恐れる。子どもさんたち今多いですよ。失敗をやたら恐れる。どうもいい子でいる。でも無理をしすぎるが故にネットの社会ではムチャクチャ言うわけですよ。これがさきほどの陰湿ないじめになったりね。まさかあの子がこんな子だったとは思わなかったっていうね。これ非常に不幸な現象が起きている。それを言うんだったら表の場で言って、ネットでゴメンねって。朝、親に怒られてムカムカしてたからあんたにあたったけどホントはあなた好きだよとか言ったら、ほっとするのがまったく逆をするんですよ。だからそうしたチャレンジをしやすい環境、これはイコール失敗何度してもいいよと。ただ、致命的な失敗をしないための失敗をきっちりとみんなで見守ってあげると。失敗したらダメだっていうんじゃないで、失敗はするだろうと。でもセーフティーネットにみんながなってあげると。ということが次にチャレンジをしやすい環境を作っていくんじゃないかと。おそらくそういう環境があればノーベル賞はもっときつと出るはずですね。それが一番よく分かるのが東京大学はいかにノーベル賞に縁遠いのか。まさに失敗を恐れる人たちがその頂点に来たからこんな日本になっちゃったと。そうした環境をいかに創り上げるかっていうのは、今日、皆様方からいただいて、まずは強く思った点でありますので、我々もこれをどう具現化をしていくのか。また教育現場でも是非、そうした事例をね、どんどん挙げてきていただければと思います。今、東京から戻ってきたところなんですけど、午前中に消費者庁の消費者教育推進会議、総理の諮問機関であるわけですが、その場で中教審の話が出ました。というのは、公職選挙法が改正となって18歳に選挙権が、来年の6月の半ばから、いよいよこれがスタートとなるところでありますね。今、民法上の話でも成人の概念をいよいよ18歳に下げよう。例えば、契約であろうがあらゆる面が18歳から成人になるのがもう目前になってきているんですね。ということで、これはもう高校の段階から変わらなければいけないということで、新しい教育分野として公共。こうした分野がこれから出てくる。高校段階でということなんです。この点については私もちょっと意見を言わせていただきまして、高校からでは遅いと。高校になっていきなりったってこれは無理ですよ。やっぱり中学校、あるいは小学校、そういうところから自然の流れで入ってきて、そしてその権利を、まあこれ権利になりますから、それをスタートさせるのが18歳だということにしていかないと、とてもとてもこれは難しいということで、

是非、今後の総合教育会議で、これは我々自体、あるいは日本全体が求められる大きな方向になりますので、こうした点についても是非、ご意見をいただいてどう取りまとめていくのか。これからの我々としてはもう目前にある非常に大きな課題でありますので、この点については是非、教育委員の皆様方にもよろしくお願ひ申し上げたいと思います。

ということで、今日は大変前向きな話でございました第2回の総合教育会議、以上で閉じさせていただきたいと思います。6名の発表の皆様方、本当にどうもありがとうございました。

**(司会進行)**

**<七條政策創造部長>**

ありがとうございました。本日、ご議論いただきましたご意見を参考といたしまして、大綱の策定に向けて作業を進めさせていただきたいと思っております。なお、事務連絡でございますが、次回の会議の開催につきましては、8月上旬頃に行いたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひします。それではこれで、第2回総合教育会議を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。

**以 上**